

「特別の教科 道徳」におけるアクティブ・ラーニングを用いた 学習指導に関する考察

研修機関 高知大学大学院総合人間自然科学研究科 指導教官 氏名 岡谷 英明
安田町立安田中学校 職名 教諭 氏名 植松 拓

1 はじめに

これまでの道徳授業の多くは、一般的に読み物教材に登場する人物の気持ちを考えさせ、道徳的価値を理解させるような授業であった。筆者も、その指導方法で道徳の授業を行ってきた。授業を重ねるにつれて、授業後の感想やワークシートに書かれる文字数は減り、深く考える生徒が少なくなっていく印象がある。道徳の時間を、「めんどくさい、またか」などマイナスイメージをもって生徒が捉え始めるようになった。こうしたことの要因は、道徳の時間に意欲的に取り組ませるための指導力が筆者に不足していたことにあり、つまりは、指導方法の工夫がなされていなかったことにある。そこで、筆者は、道徳の学習指導の現状に関するアンケート調査を高知県の小・中学校の教員に行い、現在行われている道徳授業の課題を見てみると、「児童生徒が教材の登場人物の立場に立って考えたり、道徳的な行為・行動を疑似体験して考えたりすることができるよう、役割演技や動作化を取り入れることを積極的に行っていない」と「児童生徒が道徳的価値や問題について多面的・多角的に考えられるよう、異なる立場や自他の意見の違いに着目した発問や問い返しをすることが、実際の道徳授業ではできていない」ことが分かった。

本調査で明らかになった課題をもとに、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善の方策を図っていくためには、道徳科における質の高い多様な指導方法を取り入れていく必要がある。そのため、そうした授業方法の一つとしても取り上げられている、役割演技を取り入れ、疑似体験的な表現活動を行うとともに、生徒が自ら道徳の問題に取り組み、多面的・多角的に考え議論するための問いの工夫を行っていく必要があると考える。

したがって、本研究では「生徒が道徳の授業に意欲的に取り組めていないのではないか」という問題解決のために、アクティブ・ラーニングを用いた学習指導が大切だと考え、アクティブ・ラーニングの視点である「主体的・対話的で深い学び」の実現を意識して以下の実践を行うこととした。

2 研究目的

本研究では、道徳科においてアクティブ・ラーニングを用いた学習指導として、「アクティブ・ラーニング型道徳授業」を継続して行えば、生徒が道徳の学習に対して意欲をもつようになるという仮説を立て、これを検証することを目的とする。この目的に沿って考えれば、まず本研究における「アクティブ・ラーニング型道徳授業」とは、どのようなものを明らかにする必要がある。そこで【実践研究Ⅰ】として、役割演技と問いの工夫に着目して授業を構想、実践し、「役割演技と問いの工夫を生かした道徳授業」が、「指導書通りの心情理解に偏った道徳授業」と比べて、「主体的・対話的で深い学び」となることを検証して、アクティブ・ラーニング型道徳授業の要素を明らかにする。そして、【実践研究Ⅱ】として、その要素をもとにして、「アクティブ・ラーニング型道徳授業」を構想、実践することとする。【実践研究Ⅱ】では、一つのクラスで授業を12回（1学期間）継続し、授業がアクティブ・ラーニングを用いた学習として、主体的・対話的で深い学びが成立していたかどうかを確かめたうえで、12回の授業の事前・事後を比較して研究の目的に示すとおり、生徒が道徳の学習に意欲をもつようになったかどうかを検証する。

以下、図1に本研究の構想図を示す。

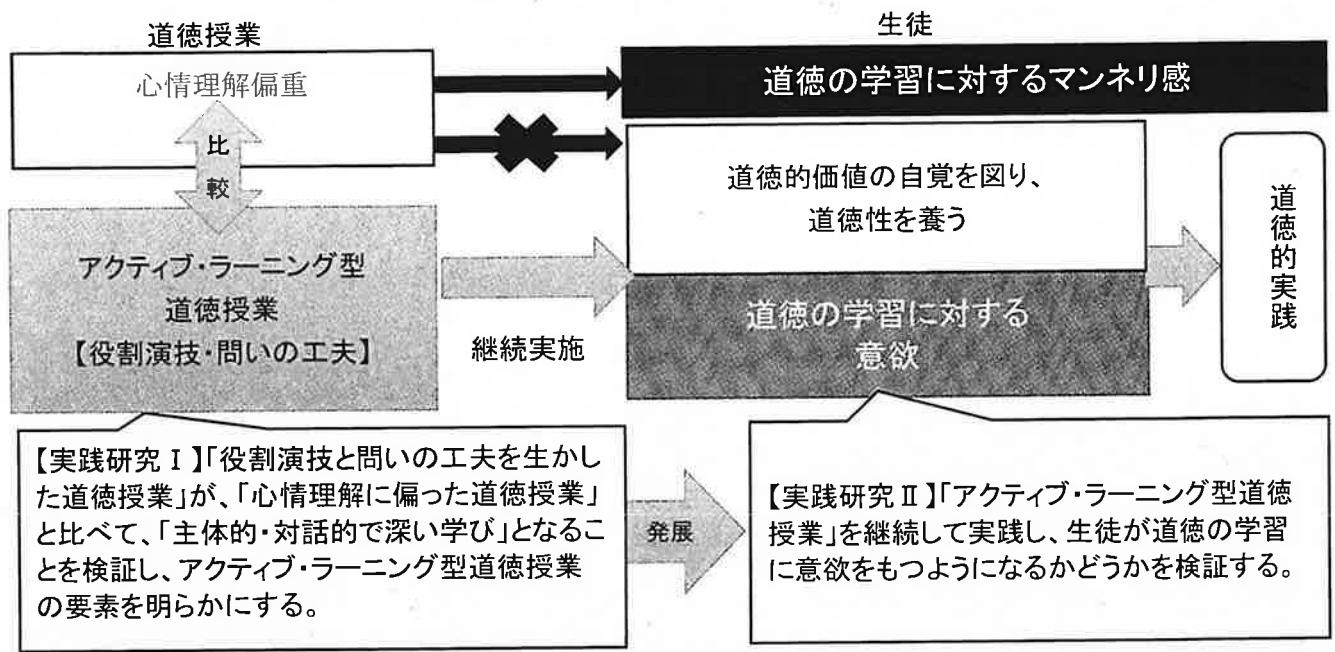


図1 研究構想図

3 研究内容

(1) 役割演技と問いの工夫を生かした道徳授業の実践（平成29年度）【実践研究Ⅰ】

アクティブ・ラーニングの視点である「主体的・対話的で深い学び」を実現するための一つの手法として【実践研究Ⅰ】役割演技と問いの工夫を生かした道徳授業を実施し、その効果と課題を把握する。

授業全体のなかで問いの工夫を行い、活動として役割演技を取り入れていくことで主体的・対話的で深い学びを生じさせるようにする。①道徳的な問題を自分の生き方や日常と関わりのあるものと認識し解決したいという意欲をもつこと。②道徳的な問題について他の人だったらどうするかという多様な意見を聴き、それを取り入れて考えること。③①・②のもとに、道徳的課題の解決のために何が重要なのかさらに深く考え道徳的価値について追究すること。ということだといえる。これら①、②、③について、本研究では①自我関与を図ること、②他者理解を図ること、③課題追究を図ることとし、授業では、これら三つを学習の中で生じさせるようにアプローチしていきたいと考える。この①、②、③は、以下の表のとおり整理される。

表1 アクティブ・ラーニング型道徳授業のアプローチ

① 自我関与を図ること 道徳的な問題を自分の生き方や日常と関わりのあるものと認識し解決したいという意欲をもたせること。
② 他者理解を図ること 道徳的な問題について他の人だったらどうするかという多様な意見を聴き、それを取り入れて考えること。
③ 課題追究を図ること ①・②のもとに、道徳的問題の解決のために何が重要なのかさらに深く考えること。

実践の実施対象は、実践に協力いただいた F 中学校で、「役割演技と問いの工夫を生かした道徳授業」では、「心情理解に偏った道徳授業」に比べて、以下のことが明らかとなった。

- ・ 「役割演技と問いの工夫を生かした道徳授業」は、「主体的・対話的で深い学び」に関する生徒の意識が高くなることを示唆するものであると考えられる。特に、友達の見解を聞いて自分とは違う考えに気づいている様子が多く捉えられる。
- ・ 「心情理解に偏った道徳授業」に比べて「役割演技と問いの工夫を生かした道徳授業」の方が、自分自身を振り返ったり、他者と意見交流をしたりして、自分自身との関わりで多様な観点から道徳的価値に関わる自身の考え方、感じ方をより深めることに役立ち、「主体的・対話的で深い学び」の観点からの道徳授業が実現できていると捉えられる。
- ・ 「役割演技と問いの工夫を生かした道徳授業」では、ほとんどの生徒（95%以上）が道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めていると捉えられる。
- ・ 道徳的価値に関する語彙変化からは、「役割演技と問いの工夫を生かした道徳授業」では、「心情理解に偏った道徳授業」に比べて、道徳的価値に関する語彙の出現が、授業後にも継続して見られたことから、「役割演技と問いの工夫を生かした道徳授業」では、道徳的価値に関わる意識が継続したと捉えられる。

以上のことから、アクティブ・ラーニング型道徳授業のアプローチの観点を取り入れて行った「役割演技と問いの工夫を生かした道徳授業」は、自分自身を振り返ったり、他者と意見交流をしたりして、自分自身との関わりで多様な観点から道徳的価値に関わる自身の考え方、感じ方をより深めることに役立ち、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた道徳の授業改善において効果があることが分かった。つまり、以下の工夫はアクティブ・ラーニング型道徳授業の要素となり得るということである。

【役割演技の生かし方として行った工夫】

- ア 教材のストーリーを分断して結末が分からない段階で演じたり、登場人物の心理描写が描かれていない場面を演じる。
- イ 役割演技への抵抗感を減らすために、グループで全員が役割演技を行い、一人一人が演じる機会を設け他者と演技の交流を図ったうえで代表に演じさせる。
- ウ 代表者の役割演技について、演者からは演じて感じた思いを、また、観衆からは見て感じたり思ったりしたことを引き出すようにして、役割演技を通して感じたことを演者、観衆を含めた全員で共有させる中で思考を深めさせる。

【問いの生かし方として行った工夫】

- ア 導入で道徳的価値に関わる自分の経験を問いかけ主人公への共感と共に本時の主題を印象付ける発問を行う。
- イ 展開で発表者に主人公がなぜそのように考えたのかその理由を問い、発表者以外にも問うことで道徳的価値に迫れるようにする。
- ウ 展開の役割演技でなぜそのように演技をしたか理由を問い、観衆にはその演技を見て感じた思いを問う。

しかし、課題として、問題場面や授業の中心場面に行くまでの時間を使いすぎたために、肝心な中心場面とその後の話合いの場面を深めることができなかったということがある。問題場面や中心場面で十分に時間をかけられるように、時間配分に気をつける必要があった。

また、道徳的価値に関わる場面で生徒が深く考えられるような問いかけを行うこと、さらに、他者と自分の意見の違いに気づけるようにすることや根拠を深められるような問い返しを行うことなどが今後の改善点として浮かび上がってきた。

こうしたことからアクティブ・ラーニング型道徳授業のアプローチを再考して、アクティブ・ラーニング型道徳授業の要素を示すと以下の表のとおりとなる。

表2 アクティブ・ラーニング型道徳授業の要素

(役割演技)

- ① ストーリーを分断して結末が分からない段階で演じたり、心理描写が描かれていない場面を演じさせる。
- ② グループで全員が役割演技を行い、他者と演技の交流を図らせる。
- ③ 役割演技を通して感じたことを演者、観衆を含めた全員で共有させる。

(問いの工夫)

- ④ 導入で道徳的価値に関わる自分の経験を問いかけて主人公への共感と共に本時の主題を印象付ける発問をする。
- ⑤ 展開で発表者に主人公がなぜそのように考えたのかその理由を問うようにする。
- ⑥ 展開の役割演技でなぜそのように演技をしたか理由を問い、観衆にはその演技を見て感じた思いを問うようにする。
- ⑦ 他者と自分の意見の違いに気づけるように問い返すようにする。
- ⑧ 根拠を深められるような問い返しを行う。
- ⑨ 道徳的価値に関わる場面で生徒が深く考えられるような問いかけを行う。

(時間配分)

- ⑩ 問題場面や授業の中心場面に十分時間が使えるように時間配分に気をつける。

(2) アクティブ・ラーニングを用いた道徳授業の実践 (平成30年度)【実践研究Ⅱ】

筆者の在籍校であるY中学校において、「アクティブ・ラーニング型道徳授業」の要素を取り入れて1学期間(12回)道徳授業を行い、こうした授業によって生徒が道徳の学習に意欲をもつようになるかどうかについて検証する。

項目を設定するにあたり、松本(2017)¹が行った授業中の活動についての因子分析を参考に、項目を設定した。

道徳アンケートは、以下の10個の項目を設定して4月(実践研究前)、7月末(実践研究後)に実施する。

授業そのものへの前向きな気持ち〔授業に対する関心・意欲〕に関する項目として1「道徳の授業は、好きですか」、2「道徳の授業に、進んで取り組もうと思いますか」、3「道徳の授業は、ためになると思いますか」、4「道徳の授業は、楽しいと思いますか」の4項目を設定した。

また、学習活動についての意欲的な気持ち〔学習活動に対する意欲〕に関する項目として5「道徳の授業で、読み物を読んだり聞いたりするのが好きですか」、6「道徳の授業で、考えるのが好きですか」、7「道徳の授業で、意見や考えを言うのが好きですか」、8「道徳の授業で、自分の考えを書くのが好きですか」、9「道徳の授業で、友達と話し合うのが好きですか」、10「道徳の授業で、友達の意見を聞くのが好きですか」の6項目を設定した。

また、尺度は、「1:全くそう思わない、2:あまりそう思わない、3:そう思う、4:かなりそう思う、5:非常にそう思う」の5件法とし、これを1~5に点数化して合計点及び各項目点から平均値を算出して筆者と大学教員1名で分析する。

¹ 松本周子(2017)「道徳科全面実施に向けた生徒の受け止めや教員の困り感に関する一考察—問題解決的な学習の視点を生かした道徳授業の試み—」『平成29年度 教職実践研究報告書 香川大学大学院 教育学研究科 高度教職実践専攻』pp.61-62

表3 道徳意識調査

道徳授業に関する意識調査

月 日

学年 出席番号

次のことについて、あてはまる番号に○をつけてください。成績には関係ありません。

NO	質問項目	5	4	3	2	1
1	道徳の授業は、好きですか。	5	4	3	2	1
2	道徳の授業に、進んで取り組もうと思いませんか。	5	4	3	2	1
3	道徳の授業は、ためになると思いませんか。	5	4	3	2	1
4	道徳の授業は、楽しいと思いませんか。	5	4	3	2	1
5	道徳の授業で、読み物を読んだり聞いたりするのが好きですか。	5	4	3	2	1
6	道徳の授業で、考えるのが好きですか。	5	4	3	2	1
7	道徳の授業で、意見や考えを言うのが好きですか。	5	4	3	2	1
8	道徳の授業で、自分の考えを書くのが好きですか。	5	4	3	2	1
9	道徳の授業で、友達と話し合うのが好きですか。	5	4	3	2	1
10	道徳の授業で、友達の意見を聞くのが好きですか。	5	4	3	2	1

図2を見ると、特に伸び率の大きかった項目は、授業そのものへの前向きな気持ちに関する項目としてあげた2「道徳の授業に、進んで取り組もうと思いませんか」で、4月実践研究前の平均値が3.8であったのに対して、7月末では平均値が4.8と1.0の大きな伸び率となっている。同じく1.0の大きな伸び率となっていた項目は、4「道徳の授業は、楽しいと思いませんか」で、平均値が3.3から4.3と伸びている。また、学習活動についての意欲的な気持ちに関する項目としてあげた8「道徳の授業で、自分の考えを書くのが好きですか」で、平均値が3.5から4.5と1.0の大きな伸び率となっている。図3の道徳授業に対する意欲をカテゴリー別に見てみても、「アクティブ・ラーニング型道徳授業」を継続した後の方が、平均値が高くなっている。

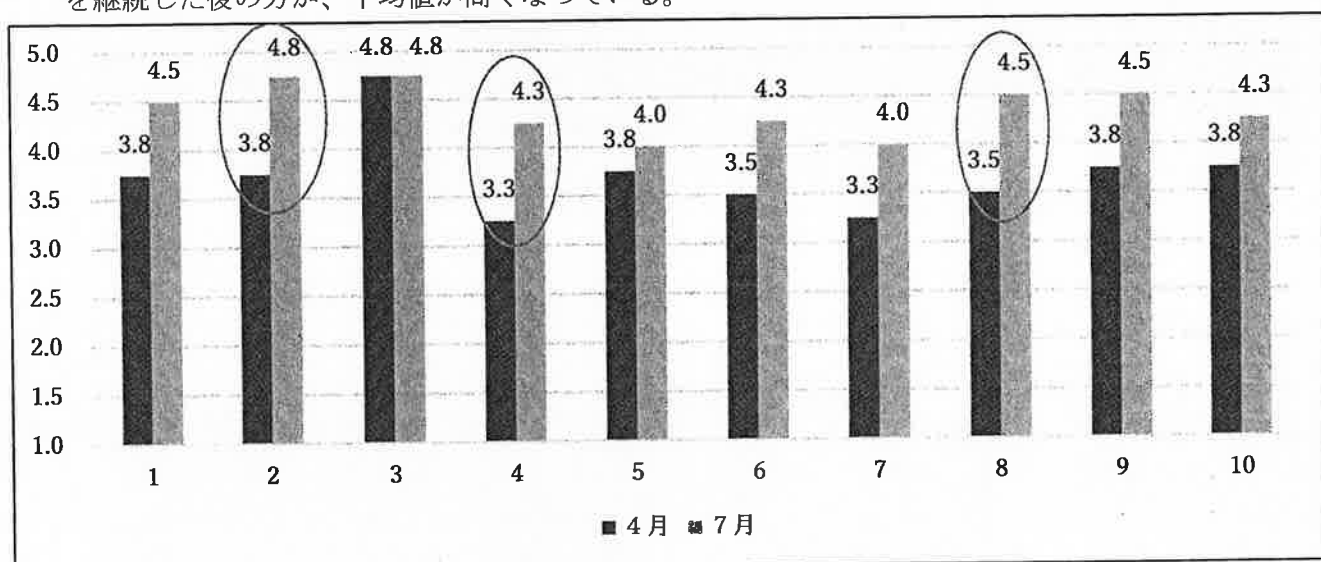


図2 道徳意識調査 (項目別) (n=4)

(○で囲んだところ、1ポイント上昇したところ)

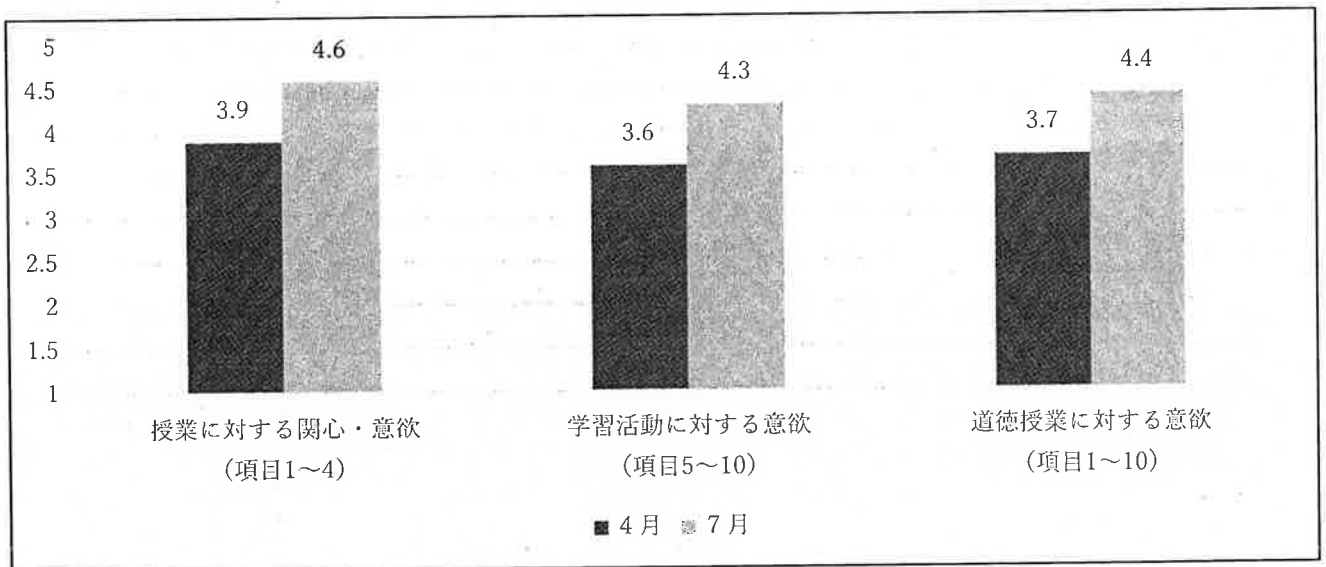


図3 道徳意識調査(カテゴリー別)(n=4)

この結果から、①～⑩の要素を取り入れた「アクティブ・ラーニング型道徳授業」は、生徒が道徳の授業を楽しみ、進んで取り組みたいという前向きな気持ちをもつことができ、自分の考えを書くことが好きになるなど、学習活動についても意欲的な気持ちをもつようになると考えられる。よって、「アクティブ・ラーニング型道徳授業」の継続は道徳授業に対する生徒の意欲を喚起する要因になると捉えられる。

4 まとめ

本研究では、「生徒が道徳の学習に意欲的に取り組めていないのではないか」という課題について、アクティブ・ラーニングを用いた学習指導が大切だと考え、アクティブ・ラーニングの視点である「主体的・対話的で深い学び」の実現を意識して実践と考察を行ってきた。実践研究Ⅰでは、役割演技と問いの工夫に焦点をあて、表1に示すアクティブ・ラーニング型道徳授業のアプローチを盛り込んで道徳授業を行った。その結果の反省・考察によって、アクティブ・ラーニング型道徳授業の要素として表2の①～⑩が見いだされた。実践研究Ⅱでは、①～⑩の要素を取り入れた「アクティブ・ラーニング型道徳授業」を1学期間継続して行い、生徒が道徳の学習に対する意欲をもつようになるかどうかを検証した。その結果、生徒は、道徳の授業を楽しみ、進んで取り組みたいという前向きな気持ちをもつことができ、自分の考えを書くことが好きになるなど、学習活動についても意欲的な気持ちをもつようになることが示唆された。よって、「アクティブ・ラーニング型道徳授業」の継続は道徳授業に対する生徒の意欲を喚起する要因になると捉えられた。

本研究の題目である「特別の教科 道徳」におけるアクティブ・ラーニングを用いた学習指導の一例が、この「アクティブ・ラーニング型道徳授業」であり、それは、表2に示す要素をもつものであると言える。この要素にある役割演技を学習指導の中核とし、問いの工夫を加えながら時間配分に留意して構成した授業が、生徒の道徳授業に対する意欲を喚起し、道徳性の育成につなげていくことができる「特別の教科 道徳」におけるアクティブ・ラーニングを用いた学習指導の一例だということである。

このアクティブ・ラーニングを用いた学習指導として、本研究では、役割演技に着目し、実践を行ってきたが、この役割演技について、今後の道徳授業の改善に向けた提案を以下にまとめる。

【「アクティブ・ロールプレイ」の提案】

これまでの道徳授業の問題点として、教材に登場する主人公の心情理解に偏りすぎた授業が展開され、生徒も道徳の学習に対するマンネリ感を学年が上がるにつれて持っているということが挙げられていた。そんな問題点を打破するための効果的な方法の一つとして筆者は、特に中学校の教員の活用率が低く、筆

者自身も一度も試みたことがない活動である「役割演技（ロールプレイ）」に着目した。役割演技が、中学校における指導方法としてあまり使われてこなかったのには、中学生という自意識に目覚める発達段階の生徒にとって効果的なやり方が明らかにされていなかったからではないかと考える。

「アクティブ・ラーニング型道徳授業」として、役割演技を用いた道徳の授業では、自分自身を振り返ったり、他者と意見交流をしたりして、自分自身との関わりで多様な観点から道徳的価値に関わる自身の考え方、感じ方をより深めることに役立ち、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた道徳の授業改善において一定の効果を発揮することが検証された。また、筆者は、実践を通して、生徒が役割演技をすることによって、気持ちが開放的になり、自分の思いや考えを発しやすくなるということにも効果があるということも感じた。

こうした結果が導かれたのは、「役割演技（ロールプレイ）」が中学校においても効果的に機能するように以下の①～③の工夫をした点にある。

- ①特に、主体的な学びを促すことを意図し、教材のストーリーを分断して結末が分からない段階で演じさせたり、登場人物の心理が詳細には描かれていない場面を演じさせたりすることで、生徒が自分の考えをもって、自身の言葉で語るができるようにする。
- ②特に、役割演技への抵抗感を減らすとともに、主体的な学びや対話的な学びを促すことを意図し、グループで役割演技をさせ、一人一人が演じる機会を設けて他者と演技での交流を図ったうえで、全体の場で数名に演じさせるようにする。
- ③主体的な学び、対話的な学び、深い学びを促すことを意図し、全体の場で役割演技についての意見交流を行って道徳的価値の自覚に迫るようにする。その際、役割演技でなぜそのように演技をしたか理由を問い、観衆にはその演技を見て感じた思いを問うようにする。

本授業実践では、こうした役割演技を学習の中心におき、その他の発問はできるだけ少なくしてこの活動に焦点をあて時間を割いた授業づくりを行った。そして、役割演技と連動して「なぜ」「どうして」「あなたはどう思う」などと問い返したり、生徒と教材の登場人物、また生徒同士の考えの違いを焦点化して問い返すなどして、生徒の思考を能動的なものにさせるようにした。生徒が能動的・自発的に意見を述べられるようになれば、教師は授業の中でリーダーとなるのではなく、ファシリテーターに徹し、生徒に語らせることを大切に生徒同士の発言を基に授業を展開させていった。こうしたことこそが、アクティブ・ラーニングの視点である「主体的・対話的で深い学び」へとつながるものだと筆者は考えている。加えて、こうした役割演技を成立させるためには、道徳授業全般についていえることだが、日頃から何でも言い合える学級づくり、人間関係づくりが重要であるということも改めて感じさせられた。

以上のように本研究で行った①～③の要素を盛り込んだ「役割演技（ロールプレイ）」は、自分自身を振り返ったり、他者と意見交流をしたりして、自分自身との関わりで多様な観点から道徳的価値に関わる自身の考え方、感じ方をより深めることに役立ち、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた道徳の授業改善において効果を発揮することが検証されたことから、筆者は、これを「アクティブ・ロールプレイ」と名付け、道徳の授業改善を図っていくうえでの多様な指導方法の一つとして提案し、中学校においても積極的に導入していくことを期待したいと考える。

《引用文献》

- ・松本周子（2017）「道徳科全面実施に向けた生徒の受け止めや教員の困り感に関する一考察—問題解決的な学習の視点を生かした道徳授業の試み—」『平成 29 年度 教職実践研究報告書 香川大学大学院 教育学研究科 高度教職実践専攻』pp. 61-62

《参考文献》

- ・森有希・田邊重任（2016）『「特別の教科道徳」の学習指導に関する考察—道徳教育の歴史的変遷を踏まえて—』